

# 水稻の生育状況と当面の対策

基本技術を励行して消費者に「おいしいお米」を届けよう！

<http://www.pref.chiba.lg.jp/seisan/seiku/index.html>

第 3 報  
千葉県農林水産部  
平成 24年 6月 26日

- 「コシヒカリ」の幼穂を確認し、適期の穂肥施用を (2ページ)
- 出穂前 3 週間～出穂後 2 週間は湛水管理を (3ページ)
- 加里を適正量まで施用し、セシウム吸収抑制を (6ページ)

## 【 生育概況 】

全体的に生育は平年より進んでおり、茎数は並～やや多めです。また、「コシヒカリ」では葉色の濃いほ場が見られます。なお、台風 4 号の強風の影響で葉先がすれています。

「コシヒカリ」はまもなく穂肥の時期を迎えます。幼穂長 (1 cm) を確認し、適期に施用しましょう。

また、今年は低温が周期的に襲来しています。4 月 20 日植えの「ふさおとめ」と「ふさこがね」は冷害危険期を迎えているので、今後の気象情報に注意し、低温が予想される場合は湛水し、保温に努めましょう。(表 2 参照)

農林総合研究センター発表の 6 月 13 日付け病害虫発生予報では「いもち病」の予想発生量は平年並です。梅雨期は感染しやすい条件が続くので、ほ場をよく見回って早期発見・適期防除に努めましょう。

表 1 品種別の生育状況 (6 月 25 日現在)

品種	植付時期	平年遅速	平年比		
			草丈	茎数	葉色
ふさおとめ	4 月 20 日頃	やや早	並～やや低	並～やや多	やや淡
ふさこがね	4 月 20 日頃	やや早	並～やや低	並～やや多	やや淡
コシヒカリ	4 月 20 日頃	やや早	並	並～やや多	並～やや濃
	5 月 1 日頃	やや早	並	並～やや多	並
ふさのもち	4 月 20 日頃	やや早	並	並～やや多	並
	5 月 10 日頃	やや早	並	並～やや多	並

※ 過去 5 か年 (2007～2011 年) の平均値との比較。ただし「ふさのもち」は 2010～2011 年の平均値との比較。

表 2 「ふさおとめ」と「ふさこがね」の冷害危険期

品種	植付時期	幼穂形成期 (月日)	冷害危険期予測 (月日)
ふさおとめ	4 月 20 日	6 月 15 日頃	6 月 25 日頃
ふさこがね	4 月 20 日	6 月 15 日頃	6 月 25 日頃

表 3 「コシヒカリ」の幼穂形成期と冷害危険期の予測

品種	植付時期	幼穂形成期予測 (月日)				冷害危険期予測 (月日)
		県北	九十九里	内湾	県南	
コシヒカリ	4 月 20 日	6 月 27 日	6 月 23 日	6 月 22 日	6 月 21 日	7 月 1 日頃
	5 月 1 日	7 月 2 日	6 月 30 日	6 月 29 日	6 月 28 日	7 月 8 日頃

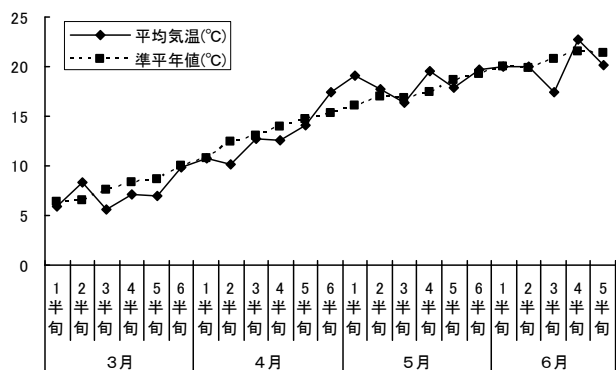


図 1 日平均気温の推移 (アメダス、佐倉)

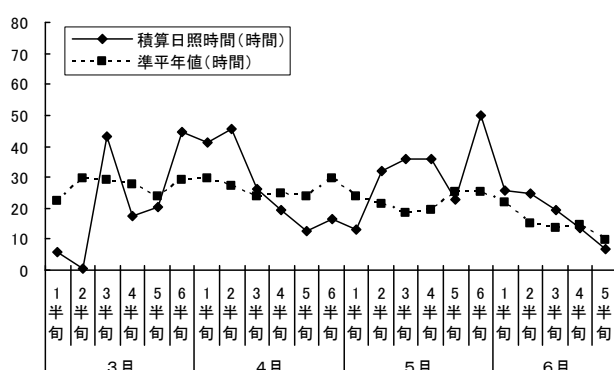


図 2 日照時間の推移 (アメダス、佐倉)

## 【 これからの管理のポイント 】

### ■ 「コシヒカリ」の幼穂を確認して適期穂肥に備えよう

「コシヒカリ」は「ふさおとめ」や「ふさこがね」と比べて倒伏しやすいので、穂肥の適期施用を図りましょう。葉色、莖数及び草丈から総合的に診断します。幼穂形成期の時点で、莖数が多かったり、葉色が濃かったりする場合は穂肥の減量や施用時期を遅らせる（ただし遅くとも出穂前10日までには施用）ようにしましょう。診断方法は表4を参照してください。

表 4 幼穂形成期における「コシヒカリ」の穂肥・倒伏軽減剤の要否判定

葉色 (SPAD 値) ×莖数/m <sup>2</sup>	草丈 (cm)	予測される生育・収量	対策
16,000 以下	70cm 未満	倒伏は避けられるが、籾数が不足しやや減収となる。	穂肥の増量。又は時期を2~3日早める。
16,000 ~20,000	70cm 未満	穂肥施用により目標どおりの生育が期待できる。	出穂前18日に、標準量の穂肥を施用する。
	70~80cm	穂肥施用による籾数確保は必要だが、穂肥施用によって稈長が伸び、倒伏が心配される。	穂肥と倒伏軽減剤とを組み合わせる。
20,000 ~27,000	75cm 未満	穂肥施用による倒伏の心配は少ないが、籾数過剰となり、乳白米の発生が心配される。	穂肥の施用量を減らす(窒素施用量 1~2kg/10a)か、時期を遅らせる。
	75~82cm	穂肥施用により籾数過剰となる。穂肥を施用しなくても稈長が伸び過ぎて倒伏が心配される。	穂肥は施用せず、倒伏軽減剤のみ施用する。

表 5 「コシヒカリ」の幼穂形成期の生育目標

草丈 (cm)	莖数 (本/m <sup>2</sup> )	葉色 (カラースケール値)
70 以下	430~560	3.5~4.0

表 6 主な倒伏軽減剤

薬剤名	使用時期／使用回数	10a 当たり散布量	処理方法
ロミカ粒剤	出穂 25～10 日前まで／1 回	2～3kg	湛水散布
スマレクト粒剤	出穂 20～7 日前／1 回	2～3kg	湛水散布
ビビフルフロアブル	出穂 10～2 日前／1 回	75～100ml	茎葉散布

▼ 穂肥の適期を判断するためには、幼穂を確認するのが一番です。

幼穂形成期は幼穂長 1mm（出穂 25 日前）の株が全体の 8 割に達した時点です。

「コシヒカリ」の穂肥の適期は幼穂長 10mm（出穂 18 日前）のときです。

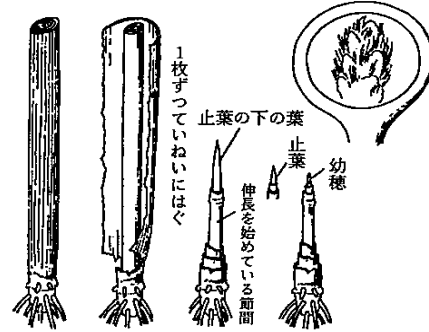


図 3 幼穂の確認方法

（出典：農文協 農業技術体系作物編 P134）

■ 水管理の原則

○ 中干しから出穂後までの水管理

基本的な水管理は①～④のとおりです。特に「③」は自然由来のカドミウムの吸収を抑えるために必要な技術です。「安心・安全」な米作りのために注意して管理しましょう。

- ① 中干しは強過ぎないように、土が湿って足跡が残る程度
- ② 中干しから出穂 3 週間前までは間断かんがい
- ③ 出穂 3 週間前から出穂 2 週間後までは湛水管理

（幼穂を確認したら、この期間は田面が露出しないように管理する。また、基肥一発肥料を使用している場合も忘れずに湛水する。）

- ④ 出穂 2 週間後から出穂 25 日後までは間断かんがい

○ 低温時には湛水

幼穂形成期以降に平均気温 20℃以下の低温の持続が予想されるときは、冷害防止のために深水で湛水（保温）しましょう。

また、低温が予想される場合でも、穂肥の窒素と加里は施用しましょう。

表 7 低温時湛水深の目安

幼穂形成期（出穂 25 日前）から冷害危険期（出穂 15～10 日前）	湛水深 10cm 程度
冷害危険期（出穂 15～10 日前）	湛水深 20cm 程度

## ■ いもち病の防除

この時期はいもち病に注意が必要です。平均気温 20～25℃で曇雨天が続いて茎や葉の湿っている時間が長いときが感染しやすい条件です。葉いもち予防の粒剤は、発生する前に散布する必要があります。葉に病斑が多数見られるほ場では、予防効果と治療効果を兼ね備えた薬剤を直ちに散布しましょう。治療効果のある薬剤は、発生確認後の早い段階の防除で高い効果が期待できます。ほ場をよく見回って、早期発見に努めましょう。

薬剤は5ページの表 8を参照してください。

## ■ 稲こうじ病の防除

幼穂分化期～穂ばらみ期に降雨が多くて気温が低い年に発生が多くなります。

出穂前が防除時期です。前年度に多発したほ場では5ページの表 10 を参照して薬剤防除しましょう。

## ■ 出穂 2 週間前までの雑草防除

出穂直前の畦畔雑草はカメムシ類の生息場所となるので、出穂2週間前頃までに畦畔雑草を刈り取りましょう。

## ■ 農薬の飛散防止

農薬の散布に当たっては、周辺への飛散を防止するため次に示す事項に注意しましょう。

- 風の弱いときに風向きに注意して散布する
- 散布の方向や位置に注意する
- ドリフト低減ノズルなど適切なノズルを用い、適正な圧力で散布する
- 適正な散布量で散布する
- タンクやホースの洗浄を徹底する
- 近接する住宅や作物の生産者等と連携する
- 緩衝地帯を設ける
- 遮蔽物を設ける
- 飛散しにくい農薬や剤型を選ぶ

現在の生育の様子



図4 ふさこがね（4月20日植え）  
6月26日（千葉市緑区刈田子）の様子

生育進度はやや早く、既に穂肥を施用した。  
湛水管理を行っている。



表 8 いもち病の主な防除薬剤

作用性	薬剤名	使用時期／使用回数	使用時期／使用回数の注記	10a 当たり散布量
予防	オリゼメート粒剤	右記／2 回まで	葉いもちには初発 10 日前から初発時に、穂いもちには出穂 3～4 週間前（ただし、収穫 14 日前まで）に散布	3～4kg
	キタジン P 粒剤	右記／2 回まで	葉いもちには初発 7 日前から初発時に、穂いもちには出穂 20～7 日前に散布	3～5kg
	コラトップ粒剤 5	右記／2 回まで	葉いもちには初発 10 日前から初発時に、穂いもちには出穂 30～5 日前に散布	3～4kg
	// ジャンボ	右記／2 回まで	葉いもちには初発 20 日前から初発時に、穂いもちには出穂 30～5 日前に散布	10～13 個
	ブイゲット粒剤	収穫 45 日前まで／2 回まで	葉いもちには初発 20～7 日前に湛水散布	3kg
	フジワン粒剤	収穫 30 日前まで／2 回まで	葉いもちには初発 10～7 日前に、穂いもちには出穂 30～10 日前に湛水散布	3～5kg
	ルーチン粒剤	収穫 30 日前まで／2 回まで	葉いもちの初発までに湛水散布する。	1kg
	ラブサイド粉剤 DL	収穫 7 日前まで／3 回まで		3～4kg
予防・治療	イモチエース粒剤	収穫 35 日前まで／1 回まで		3kg
	カスラブサイド粉剤 DL	穂揃期まで／2 回まで		3～4kg
	ノンプラス 粉剤 DL	収穫 21 日前まで／2 回まで		3～4kg
	// フロアブル 1,000 倍液	収穫 21 日前まで／2 回まで		注
	ブラシン粉剤 DL	収穫 21 日前まで／2 回まで		3～4kg
	// フロアブル 1,000 倍液	収穫 21 日前まで／2 回まで		注
治療	カスミン粉剤 DL	穂揃期まで／2 回まで		3～4kg
	// 液剤 1,000 倍液	穂揃期まで／2 回まで		注

注：フロアブル剤、液剤の 10a 当たりの散布量の目安は、本田初～中期：100～120 リットル、穂ばらみ期・出穂期：120～150 リットル。  
 粒剤は散布後 7 日間は止水する。

表 9 稲こうじ病の主な防除薬剤

薬剤名	使用時期／使用回数	10a 当たり散布量	備考
モンガリット粒剤	収穫 45 日前まで／2 回まで	3～4kg	出穂 3～2 週間前に、必ず湛水した水田に処理し、その後 7 日間は止水する。
ブラシンフロアブル 1,000 倍液	収穫 21 日前まで／2 回まで	120～150 リットル	
ブラシン粉剤 DL	収穫 21 日前まで／2 回まで	4kg	
ラテラ粉剤 DL	収穫 14 日前まで／3 回まで	3～4kg	
撒粉ボルドー粉剤 DL	出穂 10 日前まで／－	3～4kg	
Z ボルドー粉剤 DL	出穂 10 日前まで／－	3～4kg	

# 米の放射性セシウム吸収抑制対策

## ～中間追肥または穂肥で加里を補いましょう！～

今年の4月1日から、米の放射性セシウムに係る新たな基準値は1キログラム当たり 100ベクレルとなり、昨年より厳しくなりました。

各生産者が米の放射性セシウム吸収抑制対策に取り組み、早場米産地として、地域の米がスムーズに出荷できるように努めましょう。

### <ポイント> 加里肥料を適正量まで施用しましょう！

県の加里の施用基準量は、基肥 6～8kg/10a、穂肥 1～3kg/10a です。

加里を施用することによって、放射性セシウムの稲への吸収を抑制することができます。なお、倒伏を防ぐため、窒素は適正量とします。

特に土壤中の加里含量が少ないことが見込まれる以下の水田では、中間追肥や穂肥で加里の施用を行いましょう。

- ①倒伏を回避するため、基肥の施用量を控えた水田。
- ②一発肥料のみの施用で穂肥分の加里が不足している水田。
- ③耕畜連携等により水田から稲わらを持ち出し、堆肥を入れなかった水田。
- ④土壤に含まれる加里が少ないと思われる（砂質）水田。

#### 施肥に際しての注意点

- 一発肥料を施用している場合は、穂肥分の加里が含まれていないため、中間追肥（幼穂形成期前の施肥）または穂肥で、窒素成分を含まない加里肥料（ケイ酸加里や塩化加里）を施用します。
- 基肥と穂肥を体系で施用している場合は、穂肥の適期にNK化成等の窒素と加里を含む肥料を施用します。また、中間追肥を行う場合は、稲の倒伏を防ぐため、窒素成分を含まない加里肥料を施用します。

施肥体系	中間追肥 (幼穂形成期前の施肥)	穂肥
一発肥料	窒素成分を含まない加里肥料	
基肥+穂肥	(窒素成分を含まない加里肥料)	窒素・加里肥料

加里肥料の施用量：いずれも加里成分で 3kg/10a

成分から換算すると ・ケイ酸加里：15kg/10a または  
・塩化加里：5kg/10a となります。